

海外派遣研修報告

がん研究会有明病院 治療放射線部 北村 望

2011年9月20日から29日まで、テキサス州ヒューストンにある MDAnderson Cancer Center の Radiation Physics Unit の見学研修に行かせていただきました。

海外派遣研修に応募した理由は、医学物理士という職業が確立しているアメリカにおける臨床への取り組み方を学びたかった、ということです。先方に提出した希望研修内容も、臨床の医学物理士の方々の業務、ということにしました。

まず当院で、現在診療放射線技師が行っている、シミュレーターや照射以外の業務を挙げてみます。治療計画、シミュレーター前の治療計画送り出し、治療のための MU 値独立検証、RIS や治療プランの照射開始前チェック、IMRT 計画検証、治療装置および周辺機器の品質管理、治療計画装置立ち上げ関連業務、システム整備、その他新しいことへの取り組み、つまり全般に関わっていることとなります。業務内容で言うと、今回の研修で教えていただいた項目はこれらとほぼ同じです。異なる点は、MDAnderson Cancer Center では体幹部定位照射の位置合わせと照射にも毎回、医学物理士が立ち会います。また、放射線治療計画と MU 値独立検証は Dosimetrist と呼ばれる治療計画専門の方々が行い、医学物理士はその結果の確認を行います。

アメリカで医学物理士が広く活躍しているのは何故か、ということを経験から考えてみました。私が素晴らしいと感じた点は、医学物理士になった後も指導者のもと学んでいくという教育体制が臨床現場においても整っていることです。幾つかの部位ごとのグループがあり、それぞれに経験を積み知識の豊富なグループの長がいます。医学物理士の方々は臨床における問題点などについて長と相談し、学びながら業務をこなしていきます。実際、私が質問したときに上司に質問した方が良く、と教えてくれたことも多々ありました。もう一つ良い、と感じたことは、臨床と研究が分かれていることです。今後臨床につながられる環境で研究を中心に行うグループがあるということは、アメリカの医学物理が進んでいると言われる一つの理由なのではないかと感じました。

今回の研修から、医学物理士部門を施設ごとに作るのが難しい現状では、先輩から教えていただいたりセミナーに積極的に参加したりすることで、アメリカのような医学物理士認定後の勉強の場になることを実感し、これまで以上に学んでいく姿勢を持とうと改めて感じました。また、新しい取り組みについて

は、時間をうまく作ることから考えていかなければならないと感じました。

この度は大変貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございます。